

いわゆる過疎地域の家族関係 (11)*

—— 地域共同体意識の変容(2): 私的共同活動の場合 ——

植村 勝彦

先に報告した「公的共同活動の場合」(植村, 1972)に引き続き、本稿では地域共同体意識の変容の様相を「私的共同活動」の諸側面から明らかにすることを目的とする。

問題意識および分析資料に関しては前報告に同じであるが、資料の分析手順について方法的には全く変わりのないものの、内容の面で「公的共同活動の場合」とは若干の相違があるので、まずこの点に言及しておきたい。

1) 私的共同活動の「種類」の選定については、先の公的共同活動の場合が、それに関連のありそうなコメントをすべてチェックし分類した結果の所産であるという意味合いが強かったのに対し、ここでは予め種類を次の5項目に定めた。すなわち、農事共同、近所づきあい、親戚づきあい、結婚式、私的共同活動一般、である。この方法を採用した理由は、前者が被面接者の発言内容からの判断や公式の制度・規約などの存在によって、自ずから一定の種類に収まるのに対し、後者は「私的」であるが故に規程がなく、研究者側の論理の枠組に委ねられているからである。

2) それぞれの種類私的共同活動についてのコメントを内容の面から分類するに際して、「公的共同活動」において採用した「期日・回数」を止め、代りに「種類・範囲」とした。改めて理由を述べるまでもないが、上記5種類の私的共同活動において、従来のカテゴリーが実情に合わず無意味であるからである。なお、「種類・範囲」のカテゴリーに含まれるコメント内容とは、「近所づきあい」を例にとれば、「病気見舞」「みやげ物の交換」といった具体的な近所づきあいの種類、およびそれらの適用される具体的なつきあいの範囲を表明しているものを指す。「方法・内容」「意見・態度」「今昔の比較」の3カテゴリーについては前報告に同一である。ただ、「今昔の比較」において、比較の意味するものをより明確にすることを意図して次のように変更した。コメントに「昔は……であったが、今は……だ」といった「昔」の具体的な陳述のある場合にのみ「今昔の

比較」のカテゴリーに入れ、「昔と違って今は………だ」「………については昔と変わらない」など、具体的な比較内容のないコメントについてはそれぞれの内容を適宜に判断して他のカテゴリーに分類した。

3) コメント内容がふたつの「内容カテゴリー」に跨っていたり、あるいは、いずれとも決めかねるものについては、前報告と同様、無理にひとつのカテゴリーのみに分類することはせず双方にそれぞれ加える手続きを取ったが、今回の分析に特徴的なものとして、コメントの内容がふたつの「種類カテゴリー」に跨っている場合が実際にありうることとして考えられ、この場合も上述と同様の手続きに従った。例えば、「農事共同」を「親戚」にしたのんで手伝ってもらう旨のコメントである場合、発言内容いかんによっては一方の種類のみに分類することの不可能なことが起こっている。

以上の諸点の変更を含みつつ、本稿においてもこれら私的共同活動それぞれの地域全体の変容特徴を描きだすことを目的としていることから、前報告同様の手順を踏んで地域別に、それぞれの活動の種類別、かつ内容別のコメントの一覧表を作成し、本稿の末尾に附表としてコメント番号をケース番号と組合せて、一括して載せておいた。

結 果

前報告に倣って、私的共同活動のコメントを地域別、活動の種類別に附表より数えあげて整理したものが表1である。

「近所づきあい」に関するコメントの占める割合が地域を問わずかなり多いのに対し、それ以外の私的共同活動には地域による変動が著しく現われている。「農事共同」については、大蔵村、頓原町に多く、上村、富山村、水上村に少ない原因は明白で、前者が農業を主体とするのに対し、後者は農地面積が絶対的に少なく、林業を主体としているという産業形態上の相違が必然的な結果として現われている点で理解できるのであるが、「結婚式」に関しては全く解釈不能のままである。「親戚づきあい」に関しては、例えば大蔵村と頓原町における量

* 本研究の一部は、昭和46年度文部省科学研究費総合研究(A)〔代表者植村 勝彦教授〕の助成によるものである。

いわゆる過疎地域の家族関係 (11)

表1 地域別の私的共同活動に関するコメント数

	大蔵村	上村(1)	上村(2)	富山村	頓原町	水上村
農事共同	37(23.1)	—(—)	18(6.3)	2(1.6)	144(50.2)	23(6.4)
近所づきあい	63(39.4)	68(53.5)	85(29.8)	63(49.6)	81(28.2)	137(38.1)
親戚づきあい	38(23.8)	3(2.4)	6(2.1)	13(10.2)	5(1.7)	34(9.4)
結婚式	16(10.0)	31(24.4)	138(48.4)	17(13.4)	25(8.7)	153(42.5)
私的共同活動一般	6(3.8)	25(19.7)	38(13.3)	32(25.2)	32(11.2)	13(3.6)
a) 私的共同活動のコメント数合計	160(100)	127(100)	285(100)	127(100)	287(100)	360(100)
b) 村別コメント総数	5,224	1,856	6,631	2,134	4,041	5,020
比率(a/b)	(3.1)	(6.8)	(4.3)	(6.0)	(7.1)	(7.2)

カッコ内の数値は%を表わす

の差は続(1972)の描いた図が傍証としてその間の事情を適確に示している。すなわち、大蔵村(沼の台地区)においては他家族との関係中、最も重要なものは親戚関係であると認知されているのに対し、頓原町では親戚との援助や往来も少なく、彼らの意識の中には強く入り込んでいないように見受けられることから、発言量の少なさとなって現われてきたものと解釈される。この点に関する詳細な分析は、考察の項で他地域の結果をも含めて改めて取り上げることとする。

次に、私的共同活動のコメント数合計の総コメント数に対する割合をみると、大蔵村を除いて6%前後であり、先の公的共同活動の場合とおよそ類似の傾向を示していて興味深い。ひとり特異な様相を示した大蔵村について、その明確な背景を把握することは困難であるが、ひとつの有力な解釈として次の点を挙げる事ができる。公的共同活動の場合に示されているように(前報告の表1参照)、他村に比し10種類の活動の全てが公的共同活動として規定されており、地域共同活動に類するかなりの部分が公のものになっていることである。このことは、したがってまた、他村以上に公的共同活動に関するコメント数の総コメント数に対する割合の大きさと

う現象になって現われていること、さらにまた、試みに公・私共同活動を合わせて比較するべく作成した表2において、他村とは極端に公・私コメント数のバランスが異なるという点からもある程度説明がつくように思われる。ちなみに、公・私合わせた「共同活動」の総コメント数に対する割合は、表2に示されるごとく各村とも大差なく10~14%の間にあり、調査時期および地域の相違にもかかわらずわれわれ面接者側の視点には、個人差はともかくとして全体的にみれば変動は少なく、また別の見方をすれば、「共同活動」に関してわれわれ面接者の抱いていた関心は、全応答に対して高々1割強であったと言うこともできよう。

以上の点を考慮に加えたうえで、それぞれの一覧表のコメントから、各地域内の住民に共通した認知として言う特徴を、活動の種類別に記述した結果が表3である。記述に際しての注意点は前報告に述べたと同じく、1)外形的变化が共同活動に対する意識および行動に及ぼす変化をおさえること、2)「昔」の意味する具体的年代の確認、の2点であるが、その他に前報告では書き漏らした次の2点にも可能な限りの配慮を加えた。すなわち、いずれも面接に際して特定の枠組をもたないこの種

表2 地域別の共同活動に関するコメント数

	大蔵村	上村(1)	上村(2)	富山村	頓原町	水上村
公的共同活動のコメント数合計	383(70.5)	136(51.7)	389(57.7)	120(48.6)	234(44.9)	293(44.9)
私的共同活動のコメント数合計	160(29.5)	127(48.3)	285(42.3)	127(51.4)	287(55.1)	360(55.1)
(a) 共同活動のコメント総数	543(100)	263(100)	674(100)	247(100)	521(100)	653(100)
(b) 村別コメント総数	5,224	1,856	6,631	2,134	4,041	5,020
比率(a/b)	(10.4)	(14.2)	(10.2)	(11.6)	(12.9)	(13.0)

カッコ内の数値は%を表わす

の面接調査法においては必然的に生じる限界ではあるが、ひとつは、コメントの絶対数が極めて少ない場合の、ある村についての共同活動の文章化に際して生ずる一般化の限界（例えば頓原町の「親戚づきあい」）である。いまひとつは、ある現象を述べたそれぞれのコメントから、その背景要因を推察し、解釈しようとする際の難しさである。例えば、「最近、農機具の貸し借りということもなくなりました」という発言に対して、少なくとも1) 誰もが個人で持つようになってその必要がなくなった、2) 人間が薄情になって他人のことなど考えなくなった、3) へたに借りて故障でもしたら、うらまれたうえに高い修理代を出さねばならないから、かえって損だ、という3つの解釈が成り立つが、この現象記述的発言の真の意図がいずれであったのか、の問題である。この「何故」の問いつめは、全くその場の状況と、面接者の注意力、関心に委ねられており、「資料」により全くバラバラである。ただ、幸いなことには、いくつかの関連するコメントもあり、それらを総合的に判断し、共通する部分のみを抽出して記述するという原則に立っている点で、筆者の恣意と独断はかなり捨象されることは考えられる。いずれにせよ、この種の方法を採る限り、上記2点の問題は回避できないが、つまるところは研究者側の洞察力の程度いかに帰せられるものである。この意味からも、前報告に倣って本稿の末尾に附表として地域別、種類別、内容別のコメント番号のリストを挙げたものである。

考 察

1. 活動別の視点から

(1) 「農事共同」：水田稲作農耕を主体とする旧来の農村が地域共同体としての結束力を強く維持できたのは、まさにその生産形態にあったことは社会科学者の指摘の通りであろう。「水田灌漑農耕では部落全体が先祖代々共有し、共同で守り、補修をつづけてきた灌漑組織のなかで耕作を行なうため、部落全体の団結が必然的に強くなる。そしてすぐ隣の部落とのあいだでも、水争いなどで対立するため、おのずから封鎖的となり、とくに部落の掟に従わねば生産に不可欠な水をとめられるという制裁を受けるのであって、個人に対する集団の圧力はきわめて強くなる。つまり、個人は部落集団のなかに完全に埋没してしまうのである」という祖父江（1971）の見解はこの間の事情を端的に物語っている。こうした背景のもとに築きあげられてきた共同体意識が、表3に示されるように、近年かくも変容し、崩壊しかかっているのは何故か。「農事共同」に対する意識の変容は、公私

含めた共同活動の中でもその基幹的な役割を果していることからみて、詳細に分析を加えてみたい。その際、少なくともわれわれの調査した5町村の中では最も意識の変容が著しく、かつコメントの数も多い頓原町を典型例として取り上げて考察をすすめることとする。

農事共同の必要がなく、また共同意識に変容を来たした直接の要因は、今日どんな程度の経営規模の家にも一式揃っているとされる農業機械類の個人所有化にある。昭和30年代中頃までは共同購入の形態をとっていたこれらの高価な機械類が、個人所有に移った背景をコメントに則して列挙すれば次のような要因を挙げることができよう。ひとつおり年代を追って箇条書きすれば、

- a) 高価なものゆえ、最初は数軒共同で購入
- b) 農業基本法をはじめとする一連の農業政策に対する農民の不信感と生計の逼迫感の醸成
- c) 農機具類の個人購入に対する県からの補助金の支給通知
- d) 出稼ぎのはじまりと、それによる現金収入獲得の道のひらかれたこと
- e) 上記c), d)の時期と、a)で共同購入した農機具の耐用年限とのたまたまの一致
- f) 地形的条件、天候不順などの外的制約と、共有物であることによる機具の手入れ、愛着心の欠如からくる故障の頻繁などによる、他家との共有に対する潜在的不満感
- g) 資金のある人による個人所有化のはじまりと、賃金契約によるそれらの人への農機具を持たない人たちからの農耕の依頼→雑な仕事振り。依頼者の都合通りにはいかないこと
- h) 出稼ぎの恒常化による、各戸ともにある程度の現金備蓄の余裕

以上のような過程を経て、農協やメーカーの売り込み戦略とが相俟って個人購入に至ったと言えよう。そして、刈入れなどは天候のよい日に、自分の都合のよい日に、しかも出稼ぎの失業保険を得るためには6ヶ月の就労期間が必要であり、かつ田植の準備の時季を考慮すれば遅くとも11月の初旬までには刈入れの一切を済ませたい、それもできるだけ早いにこしたことはない、という計算がより便利な機械の購入へと眼を向けさせ、その代金を支払うためにはより長期の出稼ぎを必要とする、という果てしなき（悪）循環が生ずることになる。そして、このことは当然の成りゆきとして他家との関係を薄れさせ、農事共同への可能性を失わせ、延いては地域共同体意識の稀薄化を促進させることとなるのである。ただ、他村にもみられるように、田植行事に関しては共

表3 私的共同活動における地域共同体意識の変容(地域別の全体的特徴)

	大 蔵 村 (山形県)	上 村 (長野県)	富 山 村 (愛知県)
農 事 共 同	<p>田植に関しては、現在も親戚を第一として近所の人にも手伝ってもらうことをしているが、その他の農事については、今では共同することはない。田の大小、財産の有無にかかわらず、どの家にも農機具類が入っており、少ない人手で済むからである。この高価な機械類を共同で購入することは、地形、天候などの点から不可能だと考えられており、不経済を承知しつつも、どうしてももないものと認知されている。</p>	<p>農事に関する共同は、全くといってよいほど無くなった。農機具類は最初から個人持ち形式で、持たない人は賃金を支払ってやってもらっていたが、仕事の雑なこと、賃金の高いことから結局は高くつくということで、今では全て個人所有である。機械類の共同購入ができないのは、ひとつには地形の問題があるものの、つきつめれば「見栄」によるのではないかと受止められている。</p>	<p>村内に出畑自体が殆どなく、したがって、農事共同は昔からない。</p>
近 所 づ き あ い	<p>生活の便の悪さや冬の雪など(急病人、雪おろし)から、「遠くの親戚よりも近くの他人」ということで、隣近所につきあいは密接である。しかし、離村の相談や悩みごとなど私的な事柄の相談は殆ど全く無く、また他家の内容に関心も示さない。茶呑み話や井戸端会議、また男たちの一杯呑むような機会もずっと少なくなったがそれは昔よりも皆が忙しくなったからだと受止められている。つい最近農集電話がついてからは大抵のことが電話で済まされ、久しく顔を合わせたという。今やテレビと電話の影響で近所づきあいの内容も大きく変わろうとしているように見える。</p>	<p>地域的に隔絶し、これまで他部落との往来も不自由であった下栗部落を除いて、他の3部落では共通して、近所づきあいの範囲及び種類は急速に減少しつつあり、内容も形式的で心のこもらないものとなってきている、と受止められている。余程の用事の無い限り他家に行くことはないし、病氣見舞や集まって酒を呑むことも滅多にしない。この変化の直接的背景は、電話の普及とテレビ視聴によるものとして一致した見解が表明されている。しかし、更にその背後には、とにかく自分の生計をたてるのに忙しく、他人のことをかまっていない余裕が無くなったからだ、という意見もある。こうした変化に対する評価は、淋しい、とみる人と、わずらわしさが無くなりかえてよい、とみる人の2つに分かれ拮抗して未だ定まっていない。</p>	<p>村も小さく、人口も少ないので、他人あつての自分、という考え方は今も強く残っており、たまに町へ出た時には近所にみやげを買ってくるようなことは見受けられる。しかし、村民の多くが山林労務など固定収入がない職の人で毎日忙しく働かねばならず、最近ほ道端での長話や、のんびり茶呑み話をしていいる余裕もなく、実際そんな姿は見当らないという。この頃は余分なことはしない、余分な日はきかない、という風潮になって、以前のように、たとえば米がなくても1ヶ月くらいの生活は助けてくれるような人はなくなり、他人のことにはかまわなくなってきていると認知されている。しかしその傾向は人々が計算高くなったからというよりは、村の外の世界との接触や見聞が増すにつれて人間が開けてき、それに染まってくるからだ、という考え方もある。</p>
親 戚 づ き あ い	<p>本家・分家間の義務、奉仕に関する約束ごとはなくなったが、本家・分家の意識は色濃く残っている。何事によらず、相談をもちかけたり、手伝ってもらったりするのは親戚であるが、ただ余程のことでもない限り相談ごとに文句をつけることはなく、いくぶん形式的になってきつつあると自覚されている。しかし自家との関係が分らないほど遠い親戚にまでも出掛ける年4回の「仏拝み」の行事が、米の品種改良に伴う収穫期の前傾によって、秋の彼岸と重なるようになり、婦人会の決議で去年より年3回にはなったものの、こうした古い行事が依然として残存しているところにも親族結合の強さを読みとることができる。</p>	<p>つきあいは派手になって金がかかってくるようになったが、手伝いなどは頼まなければなかなか来てもらえないようになるなど、親身になる気持が薄らいできている、と意識されている。</p>	<p>戦前までの部落内同士の結婚の影響で、村中がなんらかの形で親戚関係にある。しかし、本家・分家の意識は薄らいでおり、つきあいはせいぜい兄弟くらいの関係まででおさまっているようである。離村に際しての相談も、本人が決めたあとで直前になって知らせにくる、といった程度のものである。</p>

頓 原 町 (島根県)	水 上 村 (熊本県)
<p>田植は隣保2, 3軒1組の田植組があり, 手間借りをしているが, 刈り入れ等その他の農事に関する共同作業は, 現在ではなくっており, 田植の共同も近い将来無くなると予測する向きも多い。各戸に農機具類一式を揃えており, 機械さえあれば家族だけで十分の労力だという。経営規模の小さい家の中には機械の替りに人を雇って金消化する者もあるが, それも賃に食事, おやつ, などの経費を合わせると機械をたのんだほうが安くつくということで頼まれ仕事も少なくなってきた。しかし, その機械さえも, 人に頼めば仕事も雑だし, 都合のよい日に必ずしもやってもらえないこともあり, 結局は個人所有に至る。こうした現象を無駄だと感じている者も多く, 「農協の小作になっている」と自嘲する声もあるが, 他村同様の理由から, 機械類の共同所有は無理だと判断されている。しかし, つきつめれば「見栄」と「エゴイズム」の現われだとする意見が多い。</p>	<p>部落によって, いくぶん様子が違い, 戦後の入植部落が最も共同作業が多く活発である。総体に農機具類の普及率は低く, 高価なものが入っていない。したがって, 以前に比べれば人の手を借りることは少なくなったが, 田植と稲刈りは共同で, しかも大勢の手を借りて進める方式を採っている。日当を払って頼む場合もあるが, 忙しい時はお互いということ, 手伝いの貸借をしている。しかし, 近い将来, この形も崩れ, 頓原町に代表されるような経過をたどることを予想させるような発言もみえている。</p>
<p>組外の人の病気見舞はしないと, 部落代表で済ますといった(生活改善運動に基づく)規約を作ったり, この辺は茶どころで, 他家へ行く时必须まず高価な茶が出されるが, こうした無駄は申し合わせで変えていかなければいけない, といった発言が示すように, むしろ積極的につきあいを合理的, 民主的で無駄のないものに変えていこうとする姿勢がみられ, また, その変化の結果を良くなったと受止めている。したがって以前のような近所づきあいの様相をなつかしみ, 淋しがる声は聞かれない。</p>	<p>「つきあい倒れ」という言葉がある程交際費がかかり, なにかにつけて派手になったという。この現象は最近のことで, 他所から山林労務関係の仕事で入りこんだ人たちがもたらした風習だという。この習慣について, 頭では簡素化を考へながら, やることは反対で, しかもそれをどうにもしようがない部落のつきあいにいらだちが感じられる。こうした事ある場合の外見の派手さに比べ日常の近所づきあいは極めて乏しく, 女も昼間は山へ下刈りの稼ぎに出るなどして忙しく, 世間話をしたり, 茶を呑んだりの機会は全くないという。長期的出稼ぎ家庭も多く, 他家への関心も乏しいが, 男たちの集まる機会も減多に無く, 葬儀の時くらいだという。また, こうした変化に対する評価, 意見を述べたコメントも見当らない。</p>
<p>相談ごとの際に頼れるのはやはり親戚であり, 部落内に親戚の無い家は殆どない, という。つきあいは昔から余り変わらない, と意識されている。</p>	<p>戦後のある時期まで部落内同士の結婚が多かったことから, 村中がなんらかの形で連がっている。そのためか, 親戚づきあいは比較的頻繁で, 盆や正月に集まったり(寄り正月), 銭別を与えたり, 手伝いに行ったりなど, 細かい心配りがみられる。ただ, そうしたしきたりをどう評価するかになると意見が分かれている。</p>

同で行なわれているという背景は, 1) 田植は天候に左右されることがなく, また多少の遅れは稲の生育に影響を及ぼさないこと, 2) いわゆる出稼ぎの時期から外れていること, 3) 性能のよい田植機がまだ開発完成していないこと, によるという意見がある。したがって, これらの条件の変化する事態が生ずれば田植の共同もなくなることが予想される。

「昔は地主の, 今は農協の小作だ」という自嘲的な言葉を吐き, 現状が計算に合わない無駄の見本のごときことを認めながらも, 口に出すことはなんとなく憚られ, またへたにもちだして変に勘繰られるのはつまらないという気持が強く, ただ手をこまねいているのが実情であるという発言もある。こうした態度を含む農民心理の背景を, これまで多くの社会学者が追究してきた「農民の社会的性格」に求めたり, きだみの(1967)の言う「集団反射」や, あるいはイザヤ・ベンダサン(1970)言うところの「キャンペーン型稲作」から発する「隣り百姓」心理などに求めて論を展開することも意味なしとはしないが, 本稿の目的からいさか外れるので深くは立ち入らない。要するに, これらのコメントの分析から知り得る農事共同および共同意識の変容は, 過疎化現象の結果であるというよりも, 過疎化現象生起の原因のひとつとしての現金収入獲得のための手段のひとつであると考えられる。最近の減反政策に代表される戦後の一連の農業政策もたらした農民の農政不信が根本にあり, 農業収入だけでは生計を立てていけないという現実があり, そのための必要から生ずる出稼ぎの恒常化を可能ならしめるための自衛の手段といっても過言ではないように思われる。

(表3のつづき)

	大 蔵 村 (山形県)	上 村 (長野県)	富 山 村 (愛知県)
結 婚 式	昔から親戚が中心になって取り仕切る。最近では祝い客も時間をわきまえるようになり、2日も3日も祝宴が続くようになり、この1、2年、都会のマネをして新婚旅行をするようにもなった。土地によっても違うが、結納金は10万円程度はかかるという。自分の娘は外へ出してやりたいが、息子には嫁が欲しいという矛盾から、この数年、嫁飢饉が叫ばれ、最近では1戸に1人は娘を村に残すようにという強い申し合わせがされている。	10年くらい前までは部落内同士、それもまず親戚の適齢期の者から声をかけていくという縁組で、結納は酒1升とスルメ一束でまとまり、それは貧しさの故に親戚の数を増やさない(「重箱の数が増える」という)という考え方からであったという。5、6年前に生活改善の一環として青年たちが300円会費の公民館結婚式を主張したが、3組であとが続かなかった。親としては会費を徴収することに抵抗があり、一方、客としても祝儀をだして思う存分呑み騒ぎたいという意向が強かったからという。また、生活も楽になって、最近では昔以上に派手になってきているという。しかし、式や披露を自宅で作る家とともに、隣町の料亭へマイクロバスを仕立てて出掛ける方式もとられ、手間や後片付けの点で世話がない、と評判がよい。したがって、近所の人の手伝いもさほど必要なくなりつつある。	以前は村内同士の結婚が殆どで、それ故、つきあいもあったが、最近では就職先の都会で知り合っている、そのまま村へは戻ってこないことが多い。このことはまた、都会との交流が盛んになったことを意味するものでもあり、結婚式なども村のやり方だけでは淋しいということ、だんだん派手になってきたと受止められている。
私 的 共 同 活 動 一 般	電話、自動車、雪上車といった文明の利器の普及によって生みだされた、共同活動自体の利便性への素直な感謝の表出がみられる。他村にみられるこれらのものもたらす意識の変化としての共同活動意識の崩壊については目下のところまだ現われてきているとは意識されていないようである。	「義理」に関しては以前と大して変わらないが、「人情」の面では比較にならない程の変化だと一様に受止められている。つまり、他人にうしろ指をさされないよう形式だけは整えるが、そこには心ももってはおらず、御身第一主義だという。時代にとり残されまい、人に負けまい、とする意識が強くなり、協力、共同の観念がとみに薄らいできていると受止められているが、こうした変化の背景には、現金がものをいう時代になったからだとする意見が多い。	「誰かが羽ばたけばその人になびく」という考え方が伝統的にあり、積極的な人が少ないという。そのくせ新しいことには抵抗が強く、協力の姿勢が乏しいという意見がある。要するに自分本位で、その時々自分に都合のいいような考え方をとるようになった点が大変な変化だと受け止められており、共通した村民観である。

(四) 「近所づきあい」：「遠くの親戚より近くの他人」のことわざが示すように、近所づきあいは交友、相互扶助、利害関係、承認などの機能(久武, 1971)を果たしてきていると考えられるが、表3にみられるようにこれらの機能に対する行動および意識の変化は、農山村においても著しいことが知られよう。この変化の背景も、基底としては上述の農事共同の場合の原因、理由の認知と同一のもの、すなわち現金収入獲得の必要性とそのための時間的余裕の欠如によるという住民の認知にあると考えられるが、それとともに彼らの拳げるのは電話、テレビの普及であり、この要因の方がより直接的であることは疑いのないところである。

これらの地域における、昭和39年の東京オリンピックを直接の契機とするテレビの急速な普及は、祭り、盆踊り、巡回映画・演劇など多くの人々を一同に参集させる機会を無くさせ、夏の夕涼み、縁台将棋などの風物誌を当し、冬の雪(なま)マクチ(まき)という月ごうの

楽しみの場を奪うこととなった。一方、昭和40年成立の山村振興法に基づく措置としての電話の村内一斉敷設は、地形条件の悪い僻村の人々に計り知れない利便を提供することになったとともに、人々の出歩く機会を著しく少なくさせ、それに伴って茶呑みや世間話の楽しみを奪う結果となった。さらには、現金収入を求めての男女老若を問わぬ賃稼ぎ(土方仕事、授産施設、植林の下刈りなど)の生活が、道端でのなにげない立ち話や井戸端会議の風景を消滅させた。

地域集団の凝集力を維持していくうえに最も重要な要因である対面の機会が、これらの要因によって著しく疎外されているという状況が、近隣関係における人々の行動および意識を変化させ、大都会同様の「隣りは何をす人ぞ」の現象を生ぜしめることになる。上村では既に、1人暮らしの老人が心臓発作で死んでから半月以上も発見されずにいたという事件が発生するに至っているのである。こうした他人への関心の稀薄化および日常的

頓 原 町 (島根県)	水 上 村 (熊本県)
<p>長男の場合は自宅で行なうことが多いが、次三男の場合は出雲大社でやり、旅館を借りて披露宴を行なって、そのままお開きになる。自宅の場合も親戚が集まってまず祝い、そのあとで近所の人が呼ばれるがせいぜい組内の者だけで、部落によっては組長と婦人会代表のみのところもあり、余り騒ぐようなこともしないという。</p>	<p>部落内同士の縁組は10年程前から無くなったが、その範囲は隣の町村が圧倒的に多い。式は隣の神社が主で、披露宴もその町のホテルで済ますのが、最近の傾向である。したがって、時間を区切って、親戚、部落、友達などに分けて披露するので昔のように2、3日も呑みあかすこともなく、簡単ではあるが派手で、かえって金がかかる。このやり方の受止めかたは年代によって異なり、年寄りほど形式よりもっとじっくりと、と考えているようである。しかし、形は合理化されたものの、部落の人を宴に招待して顔合わせをさせる風習は強く残っており、それを自家だけが止めるにはできない、と意識されている。ただ、この村も、他村同様結婚式自体が少なくなっているという事実が厳然としてある。</p>
<p>「極端なことをいえば金の奴隷化している」という発言が端的に示しているように、すべてが現金収入獲得に向けられ、自分の都合で働くようになってしまった、と受け止められている。したがって、金で解決のつくことはすべて金に任せ、共同することはないという。屋根葺きもカヤを刈る手間がなく、金のかかる瓦屋根になったのだという。</p>	<p>何か一斉にやろうとする場合、皆が勤めをもってなかなか揃わないなど、共同意識の変化の問題以前に、そもそもの活動自体ができなくなりつつあるという。</p>

齢期の子をもつ親はまず第一に血縁者の中に相手を求めて声をかけ、得られないとき初めてよそに目を移すのが礼儀ですらあったと言う。「重箱を増やさない」という言葉が示すように、これは貧困の裏返しであり、貧困から身を守るための人々の合理性の表われ、悲しい生活の知恵であったことを物語っている。この傾向が、生活立地の条件の悪い僻遠の山村ほど著しかったことは自明であり、そこでは、地縁は即ち血縁、といえるような状況にあったであろう。

この関係が、戦後の家族制度廃止の効果の顕在化、優生学の啓蒙活動などによってまず血縁関係の変化として現われた。このことはすなわち、遠い血縁関係にあたるものから順にさらに疎遠になっていくことを意味し、これは同時に地縁関係の変化でもある。一方、この時期を経たのちに、あるいは進行をともにしながら生じた政府の農業政策の転換、すなわち工業優先の高度経済成長政策によって、現金収入獲得の機会と必要性をせまられた彼らの行動はま

つきあいの乏しさに対する(無)意識的な補償作用が、いずれの村のコメントにもみられる“最近はつきあいが派手になった”という発言に集約されているように思われる。そしてその例示が、水上村の発言にみられる「つきあい倒れ」という言葉で意味されているものに求めることができる。すなわち、日常的連がりが薄くなりつつあることを意識し、しかもその傾向を過去の経験との対比のうえで望ましくない、あるいは淋しいと感じながらいかんともしがたい気持の反動が、事が起こった場合(例えば病気見舞)の費用の多額さ、派手さを競うこととして現われ、形式を整えることで実質に替えよう、あるいは実質の表われであると錯覚させる役割を果しているものと解釈される。

(v) 「親戚づきあい」：表3において「結婚式」の項に記述したことと関連するが、戦後のある時期までは一般に農村における血族結婚はとりたてて言うほどの珍しい現象ではなかった。上村のコメントが示すように、適

すまず地縁関係に変化を及ぼし、上述したように「近所づきあい」の変化に一層の拍車をかけるに至る。他方、いわゆる過疎化現象が生ずるまでにあるレベルまで切捨てを済ませた血縁関係はそこで一応の安定状態に達し、その後の大きな変化は示さない。本稿で取り上げた私の共同は勿論のこと、公的共同活動を含めたすべての種類の共同活動のうちで、表3の記述が示すように「親戚づきあい」に関する行動および意識の変化の認知が最も小さいことがこの間の事情を物語っているといえよう。そしてそのことはまた、「近所づきあい」の変化と対比させたとき地縁よりも血縁の優位を例証するものでもある。“なんといっても最後に頼れるのは親戚だ”という発言がすべてを尽しているが、しかし程度に違いこそあれ、他の活動同様に変化していることもまた疑いのない事実である。離村に際して相談をもちかけることよりも、自分の決心がついてから形式的に承認を求めて報告に来るという例や、盆・暮れのつけ届けなどの消滅、親

戚といえども頼まなければなかなか手伝いにも来てもらえない、などの発言がそれを物語っている。

(二) 「結婚式」：いわゆる「過疎」であることを象徴的に示す事例がこの行事であり、またその回数の少なさの故に、コメント総数は割合あるものの、共同の具体的な活動内容や意見に関するものが少ないのもこの活動の特徴である。

都会風の挙式、披露が一般化し、派手で金のかかるものとなるとともに自宅で式の式は極めて少ないと言う。ホテルや料亭での披露宴は、したがって近所や親戚の人々の共同奉仕の必要性を無くし、単なる客の立場に留まらせる。そしてこの現象は、奉仕労力の軽減と同時に、祝う者と祝われる者、もてなす者ともてなされる者との間の関係を、意識のうえに微妙な変化を起こさせていることは想像に難くない。これまでのような奉仕もしないで披露宴に招かれることへの心理的抵抗の表われのひとつが、「組代表」の出席でこれに充てるという頓原町の形式の発想として解釈できよう。また、招く側といえども、ホテルや料亭での宴会では所詮彼らも客であり、自由なふるまいもできず、限られた時間のスケジュールに従っての行事進行とならざるをえない。こうした制約の中では、かつて彼ら自身が主役であった頃の、数日にわたる夜を徹しての楽しみを得る術もなく、年配者の不満は大きい。さらにまた、かつてのごとき、顔見知りの部落内同士の縁組とは異なり、就職先、出稼ぎ先での知り合いの例も多くなり、通婚圏の拡大とともに自村のみの祝宴の流儀に終始することもできず、盛り上がりを欠くことになる。こうしたいくつかの要因が合わさって、なんとなくよそよそしい雰囲気が生じ、真に自分たちの仲間ごとであるという味わいが妨げられることになるものと考えられる。

2. 活動共通の視点から

農事共同をはじめとする私的諸活動における共同意識の変化の背後に共通に横たわるものは、既に松田(1972)が指摘しているように「家族エゴイズム」優位の思想の台頭である。この「思想」が成立するに至る諸要因については上述のそれぞれの活動の変容の項で挙げたとおりであるが、いわゆる旧来の家族制度のもとでの「同族エゴイズム」とでもいうべき集合形態のエゴイズムに対して、条件と状況の変化に伴って、それまでは潜在化していた家族単位によるエゴの主張と拡大がみられるに至ったことの結果であると解釈される。

一方、テレビなどマス・メディアの普及と、出稼ぎによる直接の体験・見聞は、彼らを意識のうえでは都会人

化させ、都市との心理的連続感を抱かせるのに対し、時空的・地形的隔絶というどうにもしようのない現実、施設の不備などの点で都市とは比較にならない様々なハンディキャップを彼らに負わせており、そこに相互扶助以外に解決の方法のない生活における「共同」の必然性が現前するのである。都市化に関するこの意識水準と現実水準のギャップの極度に大きいのが、過疎化地域を典型とする僻村の特徴であるとも言えよう。

「家族エゴイズム」の拡大と、それに基づく生活の追求は、既に幾多の例を通して見たように、必然的に生活の「共同」に必要な連帯感を稀薄化させる。事の良し悪しは別として、都市においては極端な表現をすれば、生活に必要な「共同」を施設の完備によって、また「金」で購うことによって少なくとも「共同」の形態的属性としての労力は充たすことができ、それ故に「家族エゴイズム」の拡大と追求もそれなりの意味をもつことになる。これに対し、意識のレベルでは十分都市化している過疎地域の住民もまた、「家族エゴイズム」の追求を通して上述のギャップを「金」で埋めようとする発想をとるようになる。しかし、都会であれば金で直接買うことのできる労力も、人口減少と現金収入を求めての日常生活の多忙化によって形態的「共同」を金で買おうにも不可能であるという現実があり、ここに「家族エゴイズム」に対する緩衝作用としての「義理」の重視ないしは誇張の思想が生じてくる。“禪はずしても義理欠くな”ということわざは、かつては「共同」の本質的属性としての共同感情ないしは連帯感と、形態的属性としての労力の提供という両者を兼ね備えたものとしての「義理」を表現したものであったが、今日では端的に言えば、「義理」という「金」で形態的「共同」を買うことを意味するものとなっていると言えよう。「共同」の形態的属性としての労力すら金で買える都市生活では、とうの昔に「義理」なる言葉が死語になったのに対し、これらの地域で今も重要な生活用語として残っているのは、極端な言い方をすれば「共同」のもつ労力的側面を表現する同義語としてである。そしてさらには、この「義理」が「金」を意味する同義語になりつつあり、「近所づきあい」の項で述べた水上村の「つきあい倒れ」はまさにこの間の関係を物語る象徴的な言葉であると言えるし、表3の「私的共同活動一般」における上村に関するまとめがこのことの例証となっている。すなわち、都会生活にみられると同様、「共同」の形態的属性としての労力の提供のみを表現する言葉になってしまった「義理」が、さらに「金」で替えられるものになっていこうとしている姿である。

「家族エゴイズム」の緩衝作用としての「義理」の重視ないしは誇張の思想、とききに表現したのはこの内容を意味したものであるが、目下のところは「金」を意味するものとしてであれ重視されている緩衝作用としての「義理」も、このまま進めばいずれ近い将来には圧倒的な「家族エゴイズム」の力の前に消滅を余儀なくされ、今日の都市生活にみられると同様、私的共同活動そのものが無くなるであろうことが予想されるのである。そしてその徴候は、既に考察してきたようなかたちで現われ始め、かつ確実に住民の間に浸潤しつつあると言わざるをえない。

3. 地域差の視点から

前報告に述べたと同一の意味および基準での「地域差」の視点であり、現象的レベルでの比較分析であることを予め断っておく。

(イ) 活動内容の全体的様相を過疎パターンとの関連で見れば、公的共同活動の場合とおおよそ対応した結果を示していると言え、したがってこの点からの分析は重複を避ける意味からも先の報告に譲る。ただ、水上村については公的共同活動の場合とはやや趣きの異なった結果を示しており、むしろ現象的には大蔵村にみられる東日本型のパターンに近い印象を受ける。その背景理由として、ひとつはつい最近までの血族結婚による地縁と血縁のオーバーラップの影響、いまひとつは農業機械化の遅れ、に一応求めてはみたが、それを明確に証明するに足る資料は無く、推測の域を出ないと言わざるをえない。

(ロ) 大蔵村は「親戚づきあい」における「仏拝み」や「結婚式」の娘一人は必ず村に残すという申し合わせにみられるように、相互規制、自給自足の発想に基づくいわゆる伝統的村落共同体の名残りを今日なお色濃く留めている点で注目される。しかし、冬の急病人の処置や雪おろしの共同などの、「近所づきあい」にみられる自然環境の制約条件からの連帯は、形式的には昔と変わらないものとして受け止められているものの、“昔は冬は暇だったが、今は出稼ぎで皆多忙になった”という発言のように、日常のなんでもない事柄（立ち話、茶呑みなど）から少しずつ変化してきているのが発言の端し端しにみられる。ただ、この僅かずつではあるが着実な変化を、彼らはまだ十分自覚するところまでは至っていないというのが実情であるように思われる。

(ハ) 頓原町は他町村とは基本的に異なり、都市化への積極的志向が窺われる。すなわち、合理的、民主的に私的共同活動を運営し、無駄を排除し、古い体制から脱却することを善とする考え方である。その結果が住

民にとって望ましく、生活し易いものとなっていか否かは今後に俟たねばならないが、少なくとも現時点では、多々問題点が露呈してきていることは表3の記述が示しているとおりである。

(ニ) 上村については、これまで単車以外の動力は入らないような隔離した地理的条件のもとにあった下栗部落に自動車通行の可能な道路ができたが、生活に及ぼすこの道路の影響が今後追跡されねばならない課題である。「結婚式」に関するコメントに“道のつく前までは大きすぎだったが、これからは料理も下（部落）から運んでくれるから、大きすぎすることもなくなるだろう”という発言が既にみられているが、下栗を除く他の3部落の私的共同活動に関する意識は共通した型を示し、“とにかく自分の生活のことだけで精一杯で、他人のことなどかまっている余裕はない”という発想が根底をなしているのに対し、下栗部落住民の意識がどのような活動において、またいかなる経緯により、他部落と共通の意識になっていくのか、あるいはもっと別の意識に変容していくのか否かなど興味深い問題が数多く存在している。

(ホ) 人口300人足らずの本州最小の富山村は、水上村と類似の傾向を示し、私的共同活動に関しては公的活動の場合と異なりかなり緊密であるといえよう。その背景理由は、ひとつは水上村同様に血族結婚の要因であり、いまひとつは上述の人口の絶対数の減少による、必要からの連帯にあると思われる。公的共同活動が危機に瀕している状況にあるのに対しいさか奇異な感があるが、地縁と血縁がオーバーラップしているという現実を背景にして、そのうえに公・私両活動の自我関与の程度の差異が重なってこの結果を生んだものと解釈される。

要 約

前報告に引き続き、地域共同体意識の変容の様相を、「私的共同活動の場合」について「資料集」をもとに分析を行なった。

私的共同活動の種類として、農事共同、近所づきあい、結婚式、私的共同活動一般の5項目を取り上げ、大蔵村、上村、富山村、頓原町、水上村のそれぞれの地域の「資料集」より、上記5種類の活動について述べられたコメントをすべて取り出し、さらに各コメントを内容によって、種類・範囲、方法・内容、意見・態度、今昔の比較の4カテゴリーに分類し、最終的に、地域別、活動の種類別、内容別のコメントの一覧表を作成した（附表1～5）。この表のコメントを基に、その地域住民に共通した認知として言いうるものを取り出して記述したものが表3である。

考察は(1)活動別の視点から、(2)活動共通の視点から、(3)地域差の視点から、の3点より加えられたが、そこで討論された主な事柄はおよそ次のとおりである。

1) 私的共同活動の場合も、先の公的共同活動の場合と同様、活動や意識の変容にかなりの著しさがみられ、特に農事共同においてそれが顕著であるが、その直接的な背景要因となっているものは「現金収入の獲得の必要性」である。

2) 近所づきあいや親戚づきあいなどの変化には、テレビと電話の敷設の影響が極めて大きく、地域社会集団の凝集性の維持に最も大きな役割を果たしている「対面の機会」を著しく失わしめていることが、この結果を招いている。

3) こうした変容のさらに背後にあるものが、戦後の家族制度の廃止をひとつの契機とする「家族エゴイズム」の公然たる台頭である。この思想に、現実的問題としての現金収入の必要性の問題が相乗的に作用して、今日の地域社会がその共同体意識の変容、崩壊への道を進むに至ったものと思われる。

文 献

久武綾子 1971 家族の近隣社会に対する意識について (第1報) —近所づきあいについて— 家政学雑誌, 22, 379—385.

イザヤ・ベンダサン 1970 日本人とユダヤ人 山本書店

きだみのる 1967 につばん部落 岩波新書

松田 惺他 1972 いわゆる過疎地域の家族関係(6)—子どもに対する役割期待について(その1):山形県大蔵村沼台と島根県頓原町の比較検討— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 81—94.

祖父江孝男 1971 県民性—文化人類学的考察— 中公新書

続 有恒 1972 いわゆる過疎地域の問題(6)—家族間関係(その一)—日本教育心理学会第14回総会発表論文集, 248—249.

植村勝彦他 1972 いわゆる過疎地域の家族関係(5)—地域共同体意識の変容(1):公的共同活動の場合— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 19, 65—79.

附 表 地域別、私的共同活動別コメント(ケースNo.—コメントNo.の順)

1. 農 事 共 同

	種類・範囲	方 法・内 容	意 見・態 度	今昔の比較
大蔵村 〔200〕	6-29, 6-31, 6-32 9-24, 20-38, 25-16, 34-28, 34-30	20-40, 20-42, 25-15, 34-25, 34-26, 34-27, 34-32, 34-33, 34-34, 34-35, 35-120	1-22, 2-45, 2-61, 6-31, 11-116 11-117, 20-40, 33-22, 34-29, 34-31, 34-38, 34-39, 35-121	1-12, 1-14, 1-15, 1-16, 1-17
上村 (1) 〔100〕				
上村(2) 〔100〕	48-10, 48-47 48-58, 63-147	48-48, 48-51, 48-52, 48-56, 48-57, 62-114	48-50, 48-53, 48-54, 48-55, 67-157, 67-158, 67-159.	2-95
富山村 〔300〕	15-53, 15-131			
頓原町 〔400〕	2-89, 7-57, 7-59, 9-77, 10-80, 14-98, 15-74, 26-81, 28-73, 33-110, 34-84	2-90, 2-91, 2-94, 6-6, 6-7, 6-8, 6-49, 9-78, 10-82, 10-85, 10-88, 10-89, 17-16, 21-57, 21-58, 26-82, 26-83, 30-86, 38-52 38-53, 38-54, 38-100	2-85, 2-86, 2-87, 2-88, 2-92, 2-93, 2-95, 5-114, 6-6, 6-41, 6-42, 6-43, 6-44, 6-88, 7-58, 7-60, 8-36, 8-37, 8-38, 9-80, 10-83, 10-84, 10-85, 10-86, 11-63, 11-64, 11-65, 11-66, 11-67, 11-68, 11-69, 11-70, 11-72, 11-73, 11-74, 11-75, 14-89, 14-92, 14-93, 14-94, 16-26, 18-30, 18-31, 18-32, 18-34, 18-35, 18-37, 18-38, 18-40, 18-41, 18-42, 21-42, 21-43, 21-54, 21-5	2-97, 7-64, 8-35, 11-45, 30-72, 30-73, 30-81.

原

著

頓 原 町 〔400〕			5. 21-56, 21-59, 24-27, 25-129, 25-130, 25-132, 26-84, 26-85, 26-86, 27-47, 28-68, 28-70, 29-32, 30-72, 30-74, 30-75, 30-76, 30-77, 30-78, 30-79, 30-80, 30-85, 30-87, 30-88, 30-89, 31-64, 31-65, 31-66, 33-109, 36-101, 36-102, 36-104, 36-105, 36-106, 36-107, 36-108, 37-33, 37-35, 37-36, 37-37, 37-38, 37-44, 38-55, 38-56, 38-101, 40-88, 42-9, 42-10, 42-11	
水 上 村 〔500〕	21-91, 21-96, 37-91, 37-118, 43-73, 43-76, 44-66, 44-67	7-140, 21-92, 21-93, 22-205, 22-206, 22-207, 22-208, 37-92, 44-96	21-94, 21-95, 34-58, 43-75	37-116, 43-74,

2. 近所づきあい

	種類・範囲	方法・内容	意見・態度	今昔の比較
大 藏 村 〔200〕	4-34, 10-95 21-211, 37-38	1-116, 2-66, 2-91, 3-183, 3-185, 3-186, 4-34, 6-48, 6-49, 8-55, 10-95, 11-54, 16-131, 16-132, 23-126, 27-73, 29-89, 32-92, 34-9, 35-154, 35-172, 36-79, 37-29, 42-94, 42-98	3-182, 4-33, 4-34, 8-34, 9-27, 10-98, 17-106, 17-114, 21-210, 21-219, 27-69, 27-74, 29-91, 32-93, 33-47, 34-10, 34-82, 35-155, 36-76, 36-113, 36-114, 37-130, 42-93	12-64, 17-103, 23-159, 26-33, 26-34, 26-35, 27-71, 27-72, 27-75, 32-94, 37-132
上 村 (1) 〔100〕	1-15, 34-29, 34-33, 37-47	3-24, 9-21, 15-35, 17-41, 17-44, 17-46, 20-12, 20-23, 34-28, 36-51, 36-67, 37-48, 37-56, 39-55	6-15, 7-42, 9-19, 9-22, 9-31, 10-25, 15-36, 17-35, 17-37, 17-40, 17-44, 17-45, 19-14, 19-21, 19-43, 19-45, 20-11, 20-12, 20-13, 20-14, 23-12, 23-13, 24-30, 25-25, 25-40, 25-41, 25-68, 26-29, 26-30, 26-31, 27-21, 36-50, 36-52, 40-8	11-19, 13-20, 13-21, 13-22, 13-23, 19-15, 19-22, 24-27, 24-28, 24-29, 25-65, 25-66, 25-67, 35-34, 37-46
上 村 (2) 〔100〕	57-96, 64-83, 75-36	13-42, 19-387, 23-140, 23-187, 44-21, 48-146, 48-147, 48-148, 48-149, 49-55, 64-79, 65-109, 67-126, 67-153, 67-224, 68-87, 70-76, 70-77, 70-90, 71-117, 75-38, 76-155, 76-183, 76-187, 76-190, 76-191,	7-27, 7-28, 19-35, 19-232, 23-141, 23-142, 23-188, 25-105, 38-80, 38-93, 47-61, 48-88, 48-152, 49-55, 52-129, 54-24, 54-25, 59-146, 59-161, 59-198, 60-39, 63-148, 63-149, 64-75, 64-80, 64-82, 64-84, 65-85, 68-83, 69-90, 70-89, 70-90, 71-101, 74-147, 75-34, 75-35, 75-38, 76-64, 76-183, 76-191	2-63, 2-94, 5-97, 5-98, 5-99, 13-40, 19-34, 19-24, 7, 44-22, 47-62, 48-150, 64-81, 68-86, 70-78, 70-79, 76-189,
富 山 村 〔300〕	11-59, 16-83, 3-105	4-106, 6-53, 6-169, 8-8, 8-25, 8-26, 8-36, 8-49, 8-50, 9-37, 9-38, 9-39, 10-69, 10-70, 10-71, 10-74, 10-76, 11-62, 14-101, 15-72, 15-89, 15-125, 19-52	3-59, 3-60, 3-61, 3-75, 3-101, 3-102, 3-103, 3-105, 4-59, 4-61, 4-62, 5-31, 5-34, 8-38, 8-52, 9-34, 9-40, 9-82, 9-83, 9-84, 9-126, 9-127, 10-75, 11-63, 11-64, 14-105, 14-106, 15-125, 15-129, 15-140, 19-37, 19-115,	7-57, 8-27, 9-149, 15-126, 15-127

いわゆる過疎地域の家族関係 (11)

頓原町 〔400〕	5-111, 6-39, 7-78, 8-54, 11-136, 14-99, 16-44, 16-45, 30-70, 33-101	1-110, 6-37, 6-39, 7-86, 12-36, 12-40, 13-61, 15-73, 16-39, 16-41, 16-45, 17-82, 18-60, 18-61, 24-59, 26-49, 30-70, 33-99, 33-102, 34-30, 35-103, 39-39,	1-72, 3-10, 4-35, 4-36, 6-38, 6-39, 6-79, 6-80, 6-82, 7-63, 7-78, 7-85, 11-137, 11-138, 11-140, 12-41, 13-56, 13-60, 14-100, 16-37, 16-38, 16-39, 16-40, 16-41, 17-82, 20-81, 24-49, 26-45, 26-46, 32-24, 33-100, 34-32, 34-33, 34-88, 35-104, 39-38, 39-44, 39-45	1-15, 1-16, 3-11, 6-40, 7-79, 7-81, 11-135, 30-68, 30-69, 32-25, 39-55
水上村 〔500〕	1-28, 1-55, 3-37, 5-77, 9-120, 22-66, 32-92, 38-19, 42-13, 42-14, 43-24	1-42, 1-43, 1-53, 1-55, 3-35, 3-68, 5-71, 6-33, 6-69, 6-87, 8-90, 11-126, 14-76, 15-125, 26-69, 30-35, 30-63, 32-91, 32-93, 32-94, 32-95, 32-96, 32-97, 32-98, 32-99, 36-83, 37-27, 37-138, 38-20, 38-85, 38-86, 38-87, 38-88, 38-92, 38-93, 38-114, 39-38, 39-39	3-34, 4-113, 4-114, 5-67, 5-70, 5-73, 5-75, 5-76, 6-34, 7-115, 7-116, 9-45, 10-44, 10-45, 10-46, 10-54, 11-7, 11-127, 11-128, 11-129, 11-130, 11-141, 12-70, 12-71, 12-72, 14-77, 14-78, 14-79, 14-80, 15-124, 15-126, 15-128, 17-40, 17-41, 17-66, 19-109, 19-110, 21-90, 21-121, 21-122, 21-123, 21-124, 22-64, 22-65, 22-199, 22-200, 22-201, 25-22, 25-35, 26-64, 26-65, 26-66, 26-68, 26-72, 27-92, 29-140, 30-36, 30-40, 30-65, 32-85, 32-86, 34-36, 34-57, 37-136, 37-137, 38-21, 38-22, 41-16, 41-17, 41-18, 42-59, 42-61, 42-62, 43-23, 43-94, 43-102, 43-103, 44-65, 44-97	1-29, 1-54, 5-69, 5-72, 11-6, 22-202, 29-141, 29-142, 32-123

3. 親戚づきあい

	種類・範囲	方法・内容	意見・態度	今昔の比較
大蔵村 〔200〕	2-53, 9-21, 9-22, 10-88, 39-159	6-58, 6-59, 6-60, 10-87, 13-57, 26-47, 26-51, 29-87, 29-88, 30-26, 39-156, 39-157	2-54, 9-17, 9-23, 10-89, 10-90, 10-91, 13-58, 26-48, 26-49, 26-50, 26-52, 29-86, 30-27, 39-158, 39-161, 39-162, 39-163, 39-164	2-55, 26-53, 39-160
上村(1) 〔100〕		22-10	8-26, 16-18	
上村(2) 〔100〕	71-186	71-187	13-56, 13-57, 68-88	66-85
富山村 〔300〕	3-47, 9-135, 11-86, 18-2, 18-3, 18-7	8-48, 11-87, 14-103, 18-60, 18-61, 18-62	9-134	
頓原町 〔400〕		39-40, 39-56	7-82, 7-83	1-3
水上村 〔500〕	11-138, 20-18, 24-50, 28-74, 34-29, 38-82, 38-113, 40-99,	3-38, 11-131, 11-134, 11-135, 15-122, 15-123, 18-35, 28-116, 34-29, 38-81, 38-83, 39-40	15-121, 34-31, 34-32, 34-33, 34-34, 34-35, 34-38, 34-39, 38-94, 38-96, 38-97, 39-42, 42-16, 42-17	

4. 結 婚 式

	種類・範囲	方 法 ・ 内 容	意 見 ・ 態 度	今昔の比較
大蔵村 〔200〕	5-38, 18-64	6-64, 6-65, 8-68, 21-213, 31-66, 31-67, 31-68, 31-70	5-47, 31-69	7-28, 8-56, 8-59, 31-71
上村 (1) 〔100〕	16-34, 28-27, 36-38	1-17, 8-24, 8-25, 25-55, 25-56, 28-16, 28-17, 28-18, 28-20, 28-21, 28-22, 28-23, 28-24, 28-25, 28-26, 39-61, 42-3	1-17, 39-61, 42-4, 42-5	8-23, 14-30, 14-31, 25-54, 31-6, 35-43, 36-39
上村 (2) 〔100〕	2-65, 2-66, 19-37, 52-130, 52-132, 58-32, 58-34, 60-70, 61-173, 71-182, 76-52	2-68, 2-69, 2-70, 2-71, 2-74, 2-75, 2-76, 2-77, 2-78, 5-46, 5-47, 5-48, 5-50, 5-52, 13-11, 19-36, 23-162, 23-166, 23-168, 23-170, 23-172, 23-173, 46-94, 46-95, 47-56, 47-57, 47-58, 48-40, 52-32, 52-37, 52-38, 52-39, 52-49, 52-50, 52-131, 52-133, 59-15, 59-17, 60-63, 60-67, 60-68, 60-69, 63-108, 71-178, 76-57, 76-58, 76-59, 76-60, 76-61, 76-63	2-72, 2-73, 2-79, 5-49, 5-51, 7-77, 7-78, 7-79, 23-163, 23-164, 23-165, 23-167, 23-169, 23-171, 23-174, 23-175, 23-176, 45-154, 46-93, 47-59, 49-62, 49-63, 49-64, 52-42, 52-43, 52-44, 52-45, 52-133, 60-61, 60-62, 60-64, 60-65, 60-67, 60-71, 60-72, 60-73, 61-113, 61-114, 61-118, 61-119, 61-121, 62-130, 69-104, 71-179, 71-180, 71-183, 71-184, 71-185, 76-55, 76-56, 76-57, 76-62	2-64, 2-67, 45-31, 45-32, 45-33, 48-39, 48-41, 52-30, 52-33, 52-34, 52-35, 52-36, 58-31, 58-33, 59-11, 59-12, 59-13, 59-14, 59-16, 60-66, 61-111, 61-120, 61-175, 76-53, 76-54
富山村 〔300〕	4-96, 4-97, 4-98, 4-99, 4-100, 18-34, 19-113	18-33, 18-35, 18-37	19-54, 19-55, 19-116, 19-117	13-12, 18-38, 19-114
頓原町 〔400〕	8-34	13-78, 13-79, 13-80, 13-82, 13-86, 14-104, 14-105, 16-42, 28-75, 32-32, 34-83, 35-25, 35-26, 35-27	6-51, 7-84, 13-81, 13-83, 13-85, 14-101, 14-102, 14-103, 35-28	11-130
水 上 村 〔500〕	5-79, 6-50, 6-51, 11-145, 11-146, 11-155, 12-25, 12-26, 13-4, 13-5, 19-79, 19-80, 20-12, 23-45, 34-9	3-21, 3-23, 3-26, 3-27, 11-148, 11-149, 11-151, 11-152, 11-153, 11-154, 11-157, 12-32, 16-39, 16-40, 16-43, 18-22, 18-23, 18-24, 18-25, 19-83, 19-85, 19-86, 22-23, 22-25, 22-28, 22-32, 23-38, 23-39, 23-41, 23-42, 23-44, 28-65, 28-68, 28-69, 33-68, 33-69, 34-16, 36-35, 36-36, 36-37, 36-41, 36-44, 36-45, 36-48, 36-49, 36-50, 36-51, 37-109, 37-115, 38-3, 38-4, 38-8, 42-15, 42-82	1-31, 1-32, 2-21, 3-28, 13-6, 16-41, 19-78, 19-81, 19-84, 19-87, 20-13, 22-22, 22-29, 22-30, 22-31, 23-37, 23-43, 25-37, 25-38, 26-67, 28-64, 32-83, 32-84, 33-67, 33-70, 33-71, 33-73, 33-74, 34-11, 34-12, 34-27, 34-28, 36-42, 36-43, 36-47, 36-52, 36-53, 37-110, 37-113, 38-5, 38-6, 41-93, 41-94, 42-80, 42-81	2-23, 2-63, 3-11, 3-22, 11-143, 11-144, 12-24, 12-29, 12-31, 18-26, 19-82, 22-24, 22-26, 22-27, 28-63, 28-66, 28-67, 28-70, 28-71, 28-72, 28-73, 28-117, 33-66, 34-8, 34-10, 34-15, 34-17, 34-18, 34-19, 34-20, 34-21, 36-38, 36-39, 36-40, 36-46, 37-111, 37-112, 37-114, 38-7

いわゆる過疎地域の家族関係 (11)

5. 私的共同活動一般

	種類・範囲	方法・内容	意見・態度	今昔の比較
大蔵村 〔200〕		7-25	9-28, 27-67, 27-68, 33-48	17-113
上村 (1) 〔100〕		27-19, 41-46	3-27, 3-28, 3-32, 9-18, 10-27, 10-28, 14-27, 16-27, 16-31, 16-32, 16-33, 16-35, 27-18, 27-20, 27-23, 31-37, 31-38, 35-48, 42-54, 43-23	14-26, 27-17, 27-22
上村 (2) 〔100〕		13-51, 13-52, 19-107, 19-126, 23-85	2-57, 2-58, 2-59, 2-61, 19-106, 19-248, 19-249, 23-181, 44-20, 44-23, 45-18, 45-19, 45-52, 45-113, 45-116, 45-200, 45-331, 45-332, 45-333, 45-334, 45-352, 45-353, 45-354, 49-65, 63-150, 63-151, 65-108, 67-166, 70-81, 72-126	2-60, 7-41, 67-167
富山村 〔300〕		3-46, 4-73, 4-74, 5-4	2-38, 2-39, 2-47, 2-48, 2-49, 2-50, 2-51, 3-45, 4-76, 6-170, 6-171, 9-100, 9-101, 9-102, 9-103, 9-104, 9-105, 9-106, 11-30, 11-31, 12-133, 15-54, 15-55, 15-56, 15-57, 16-80, 16-81, 19-60	
頓原町 〔400〕		7-62, 16-33, 16-34, 34-85, 34-86, 35-100	5-125, 19-92, 19-93, 30-91, 30-122, 30-127, 33-116, 34-87, 36-49, 37-52, 37-55, 38-29, 38-111, 38-112, 38-113, 38-114, 38-115, 38-116, 38-117, 38-118, 38-120	19-91, 30-90, 36-46, 36-47, 38-119
水上村 〔500〕		7-143, 7-144, 24-52, 29-136, 29-137,	24-51, 29-162, 38-109, 38-110, 38-111, 38-112,	29-133, 29-134

STUDIES ON THE INTER- AND INTRA-FAMILY RELATIONSHIPS IN THE
SO-CALLED "KASO"(TOO-THINLY-PEOPLED) COMMUNITIES(11)

— THE CHANGE OF CONSCIOUSNESS OF COMMUNITY(2) :

ON THE INFORMAL CO-OPERATIVE WORKS —

Katsuhiko UEMURA

Continuing the previous study(Uemura et al., 1972), we attempt to explore the change of dweller's consciousness of community with the progress of "Kaso"(too-thinly-peopled)phenomenon from the aspects of the informal cooperative works.

The data used in this research are the same as the previous study, that is, are based on the raw materials which we got by means of unstructured interview method in five villages(Okuramura, Kami-mura, Tomiyama-mura, Tonbara-cho, and Mizukami-mura) from '70 to '71. Comments on five kinds of the informal cooperative works(agricultural cooperative works, social connection with the neighborhood, social connection with the relatives, odd job of the wedding ceremony, and other kinds of informal co-operative works) were picked up from the raw materials, and each of them was categorized into four aspects(kinds or sphere of the works, methods or contents, attitudes or opinions, and comparisons of the present and the past).

Based on the tables of comments gained, we described conditions of the changes, separating by the communities, and kind of the works. The results are discussed from the following three points of view: (1) from the point of view about each kind of informal co-operative works, (2) from the point of view of commonness about their co-operative works, (3) from the point of view of the difference among these communities. The major points are as follows:

1) There are significant changes of all kinds of informal co-operative works, especially on the agricultural co-works, in regard to both activity and consciousness, compared with the past. The direct background factor of this changes is necessity of cash-gaining among dwellers.

2) The influence of television and telephone is extremely great about the changes of social connection with the neighborhood and the relatives. These modern conveniences deprive them of the change of meeting which has been playing the most important role to maintain the cohesiveness of community group members.

3) The further fundamental background of these changes exist in the thought which should be named as "family egoism", being brought about the abolition of the family institution after the war. This thought, we think, acts multiplicatively on the necessity of cash-gaining of real life problem, and as a result of this effect, the activity and the consciousness about informal co-operative works in these communities have been changed and crumbled today.